

第4節 銅鐸形土製品

1 はじめに

亀井遺跡からは4点の銅鐸形土製品が出土し、全国では銅鐸形石製品（佐原 1974）、土鐸（奈良国立文化財研究所 1979）といわれるものを含めると30数例⁽⁴⁾に達する。

亀井遺跡出土の銅鐸形土製品の中には特徴的なものもあり、これらについて特に遺構との関連の深いものを中心に順次記載してみたい。

2 遺構と銅鐸形土製品

SE3001は掘方中央に杭が7本南北に、井戸を2分するかのように打ち込まれており、杭の上部には、杭に添えるようにして横木が検出された。（第75図）

埋土は3層に大別され、上位からⅠa、Ⅰb、Ⅱ層である。（第75図）

Ⅱ層は、井戸掘方底の灰色中粒砂層に、暗灰色粘土（地山）のブロックを含むことで、それと区別される。Ⅰb層は、暗灰色粘土・黒色粘土・青灰色シルト（いずれも地山）のブロック層である。

Ⅰa層は、Ⅰb層と同様であるが、砂粒を多く含むことでⅠbとは区別される。

井戸の南から東にかけての肩部から底方向にかけては、暗灰色粘土・黒色粘土・青灰色シルトの大きなブロックがみられ、いずれも肩部の崩れによる落ち込みと考えられる。

銅鐸形土製品は、杭列を挟んで西側Ⅱ層からで、東側からは杓子木製品が検出された。

銅鐸形土製品は、鐸身裾の破片であるが、外面は斜格子文が全面に施されている。鐸身横断面は復元すると、円に近い楕円形と考えられる。（第78図—6）

裾端部は肥厚し、裾端部を除いて鰭の表現がみられるが、身から屈曲するようなものではなく、身からなだらかに鰭に移る。

裾内面下端近くには、平行して2条の沈線が施されており、これは銅鐸内面凸帯を模したものと考えられ、銅鐸の特徴をよく模したとみられる徳島県名西郡石井町高川原遺跡例（天羽 1980）、三重県鈴鹿市上箕田遺跡例（真田 1970）などにおいても内面凸帯はみられない。

当井戸は、地山を掘開し、杭を打ち込み、Ⅰa、Ⅰb層で埋められている。Ⅱ層は掘削時における掘り残しとみられ、当層から銅鐸形土製品が出土していること、中央の杭列、Ⅰa、Ⅰb層で埋められていることを考えると、杭が打ち込まれた後、銅鐸形土製品による何らかの祭祀が行なわれ、埋められたことが想定される。

類似例として、岡山県下市瀬遺跡の井戸がある。

井戸は平面形が台形を呈し、各辺は平板で、その板は両側から杭または石で固定されている。井戸の東辺の板枠の外側中央部分には、七角形に面取りした角柱が立ててあった。この杭の先端

には紐状のものが一部残存していた。横木が存在する壇状の構造物は、板枠の補強および踏壇の可能性も考えられるが、中央部の角柱と、銅鐸の出土位置からみて、祭壇的な構造物として、祭りの行なわれた可能性が強い。銅鐸は、祭壇状構造物の前に、ころがり落ちたかのように出土した。(新東 1973)

銅鐸形土製品と小銅鐸の違いはあるものの、「ともに銅鐸を模した小型品であり、大多数はいずれも、ふつうの集落遺跡から、土器、石器など他の遺物とともにみいだされている(佐原 1974)。小銅鐸の多くは集落遺跡の出土品であり、埋蔵の状況からすれば銅鐸形土製品に類似した性格を示し」(名越・甲斐 1973)という共通点がみられ、下市瀬遺跡のような井戸枠は伴わないが、井戸中央に杭列がある特異性からも、同様の性格と考えられる¹²⁾。

S D3041は、弥生時代後期の包含層(Ⅱa層)を削り掘開されている。

埋土は、細礫、粗粒砂、細粒砂等で水流の早かったことが窺える堆積を示し、多数の土器群、分銅形土製品とともに、銅鐸形土製品が検出された(第240図-54)。

鈕と、裾の一部を欠くが、鐸身部はほとんどが残っている。鐸身両面に、上下2段横方向に櫛描縹状文が、1.6cmの間隔を置いて平行に施されている。型持の孔はみられず、鐸身横断面は、杏仁形を呈する。舞の部分は空洞であるが、本来は粘土で埋められていたのが、鈕の欠損とともにはずれた可能性がある。

鈕は、現存する鐸身上部からすぐに始まるとみられ鐸身との接合部は三角形を呈し、三角形か、それに近い紐がつくと考えられる。

鐸身外面の文様からすれば、横帯文銅鐸を模したものと考えられる。

S D3031は、S D3014とともに、この2条の溝から西には、ビット群が検出されていないことから、これらの溝が、ビット群と以西の溝群を画するものと考えられる。

銅鐸形土製品は、鐸身部で鈕は欠失している。裾幅5.6cm、現存高6.4cmを測り、復元高は、8cm程度とみられる(第171図-29)。

外面ヘラミガキ、内面ナデ調整で、鐸身の横断面は円形に近く、鰭の表現はみられない。舞部分も欠損のため明らかでない。

鈕の欠失部から推定すると、鈕は円形に近いものと考えられる。

K-4区ⅡbあるいはⅡc層は、弥生時代包含層であり、銅鐸形土製品はS X3004の西横から紐が垂直で横にした状態で出土した。

鐸身下半部を欠く鈕と身の一部である。鈕には円形の紐孔があり、明確な舞部は認められないが、身から鈕にかけてわずかに屈曲し、舞の表現とみられる。

身内面から舞部に孔が一孔穿たれている。これが舞に相当する部分の型持の孔と考えられる。

身の横断面は楕円形である。(第275図-5)

3 全国で出土している銅鐸形土製品

全国で出土している銅鐸形土製品をみれば、横帯文鐸や袈裟襷文鐸を模したとみられるもの、無文のもの、絵画のあるものなどがあり、それを遺跡別にみれば以下のとおりである。

横帯文鐸を模したとみられるもの

上伊福遺跡（梅原 1960）、大福遺跡（亀田 1978）、亀井遺跡

袈裟襷文鐸を模したとみられるもの

高川原遺跡（天羽 1980）、四分遺跡（猪熊 1972）、上箕田遺跡（真田 1970）、西志賀遺跡（吉田 1937）、岡島遺跡（吉田 1966）、朝日遺跡（愛知県教育委員会 1975）

無文とみられるもの

川寄若宮遺跡2例（天本・多々良 1978）、利田柳遺跡（天本・多々良 1978）、四分遺跡（猪熊 1972）、唐古・鍵遺跡（久野・寺沢 1978）、見晴台遺跡（吉田 1966）、住崎遺跡（吉田 1966）、稻荷前遺跡（真田 1970）、亀井遺跡2例

絵画のあるもの

川寄吉原遺跡（天本・多々良 1978）

さらに一遺跡で、銅鐸形土製品と銅鐸鋳型が出土した例、銅鐸片が出土した例、銅鐸形土製品が複数個出土した例がある。

銅鐸形土製品と銅鐸鋳型

東京良遺跡（三木 1979）、唐古・鍵遺跡（久野・寺沢 1978）

銅鐸形土製品と銅鐸片

朝日遺跡（名古屋市立博物館 1980）、池上遺跡（灰掛 1980）、亀井遺跡

銅鐸形土製品が複数個

川寄若宮遺跡2例（天本・多々良 1978）、四分遺跡2例（猪熊 1972）、朝日遺跡3例（名古屋市立博物館 1980）、亀井遺跡4例。

さらに、赤色顔料で着色したとみられるものに、四分遺跡（猪熊 1972）、朝日遺跡（愛知県教育委員会 1975）があり、銅鐸では兵庫県桜ヶ丘で出土した11号、12号鐸に紅殻の赤い色が付着していた例が知られる（佐原 1974）

4 おわりに

このように、銅鐸形土製品は銅鐸に忠実に模したとみられるものから、無文の形が似ているというだけのものまであり、銅鐸鋳造地である遺跡から見い出される例、銅鐸片が出土する例などは銅鐸との密接な関係を窺わせる。

出土遺構を見ると、包含層、溝、井戸、住居跡、柱穴等さまざまであるが、銅鐸形土製品の性格、用途を考えるうえで興味深い例がある。

池上遺跡においては、溝2で銅鐸形土製品が検出され、溝はその方向、時期等からみて、かっ

て検出されたⅣA、ⅣB溝と同一溝と考えられ、銅鐸の破片が出土した溝（ⅣB溝）とも同一溝と考えられるものである。これらの溝については、池上遺跡の集落（特に弥生中期～後期）の北限をなしていたものと考えておきたい（灰掛 1980）。

川寄若宮遺跡、川寄吉原遺跡、利田柳遺跡例（天本・多々良 1978）はいずれも柱穴から出土している。

これらのことから、銅鐸形土製品は上記の遺構等の出土状況からみて、集落内において種々の祭祀に用いられたと考えられる。

以後、銅鐸形土製品の出土例が増加するにつれて、具体的な用途について明らかになるだろう。

資料の収集については、門田了三氏（名張市遺跡調査会）、犬塚康博氏（名古屋市立博物館学芸員）に協力していただいた。記して感謝いたします。

〔註〕

- (1) 出土地、文献については、青銅の武器—日本金属文化の黎明 九州歴史資料館 1890の付2 銅鐸形土製品出土地名表および、戦後発見の銅鐸とその問題点 三木文雄 考古学研究紀要1 辰馬考古資料館 1979 第7表銅鐸形土製品を参考にした。
- (2) 新東 1978のまとめにおいて、特異な井戸の形態、および銅鐸の出土位置は、井戸および水を対象とする祭祀的様相が強い、と記されている。
- (3) 報告書において、袈裟褌文鐸を模したと記しておられるが、横帯文鐸を模したものと考えられる。

〔引用文献〕

- 天羽利夫 1980 「徳島だより」考古学研究第27巻第2号
天本洋一・多々良友博 1978 「佐賀県川寄・利田遺跡」『日本考古学年報31』
愛知県教育委員会 1975 「環状2号線関係朝日遺跡群第一次調査報告」
猪熊兼勝 1972 「飛鳥藤原最近出土の遺物」考古学雑誌第58巻第1号
梅原末治 1960 「新出土の銅鐸の銘范片其他」古代学研究第25号
亀田博 1978 「大福遺跡」奈良県立橿原考古学研究所
久野邦雄・寺沢薫 1978 「唐古・鍵遺跡発掘調査概報」田原本町教育委員会 奈良県立橿原考古学研究所編
佐原真 1974 「銅鐸の模倣品」『古代史発掘5』講談社
真田幸成 1970 「銅鐸形土製品」『上箕田 弥生式遺跡第2次調査報告』鈴鹿市文化財調査報告第2冊 鈴鹿市教育委員会 上箕田遺跡調査会
新東晃一 1973 「岡山下市瀬遺跡出土の小型銅鐸について」考古学雑誌第59巻第2号
名越勉・甲斐忠彦 1973 「鳥取県東郷町出土の小銅鐸」考古学雑誌第59巻第2号
奈良国立文化財研究所 1979 「飛鳥藤原宮発掘調査概報9」
名古屋市立博物館 1980 「尾張の歴史」展示解説Ⅰ
灰掛薫 1980 「池上遺跡」池上小学校建設に伴う発掘調査概要 仮称池上小学校予定地内遺跡調査会
三木文雄 1979 「戦後発見の銅鐸とその問題点」考古学研究紀要1 財団法人辰馬考古資料館
吉田富夫 1937 「尾張國西志賀発見の銅鐸形土製品」考古学第8巻第11号 東京考古学会
吉田富夫 1966 「銅鐸形土製品集成」『昭和39、40年度見晴台遺跡第ⅡⅢ次発掘調査概報』名古屋市教育委員会

〔参考文献〕

- 佐原真 1979 日本の原始美術7 銅鐸 講談社